

国立国語研究所学術情報リポジトリ

音韻論における日本語五母音体系

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 久雄, ISHII, Hisao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001075

音韻論における日本語五母音体系

石井 久雄

現代の標準的な日本語が音素として四母音体系をもつという解釈について、その可能性を疑う。

- (1) 四母音体系をもつとする解釈がはやくあり、音素論の立ち場を異にしても同様の解釈が出されていて、今後も出され得るかも知れない。
 - (2) 四母音体系の解釈はいまのところ勢力が極めて小さく、それを積極的に否認した見解も見当たらない。
 - (3) 音素上あるいは形態音素上の諸事象は、四母音体系の解釈の不合理を明らかさまにして、今後なお出され得る同様の解釈をも封する。
- この疑いを通して五母音体系の解釈を是認することになる。ただし、
- (4) 音素とは形態音素であるという立場からの是認であり、この立場によらないときにはほかの解釈も成立し得る。

一般的に言うならば、あたかも音声について母音の認知が子音の認知より困難であるように、音素について母音体系の解釈は子音体系の解釈より困難である。そのため、ある解釈を否認することを通して別の解釈に到ろうとしたのである。しかしながら、日本語の音素については、上にも言うように、五母音体系ということで解釈がほぼ一致し、したがって、新しい知見を得たことにもなり難い。五母音体系の大方の解釈が、単に五十音図をラテン文字に書き換えて成立したごとき観を呈しているので、別途に論拠を探ろうとしたまでのこととなる。ただし、五十音図を否認し去ろうとしているのではない。むしろ、音韻論という現代的な思考により、積極的に是認したく思う。また、音に対する意識のことは、五母音体系にたどり着くまでに採り上げなかつたが、これも否認し去ろうとしているのではない。ただ、文字が併存している場合にはそのために歪められ得ることを思い、言語に意識から迫

るよりは意識に言語から迫るのがまずは筋であろうことを思ったのである。

ロックの名を用いることが頻繁である。ロックは、四母音体系の解釈を採ったことがあり、しかも、脚註に述べたのみであるうえ、本格的な音素論においてはそれを斥けて五母音体系の解釈を採っている。したがって、ロックの名は、ロックその人を指すよりは、四母音体系の解釈を初めにかつ巧みに考えた人の名を用いて、同様の解釈を考える人を一般的に指していると心得ることとする。もとより、ロックその人を頻繁に指すことも、避けることができない。なお、ロックの一連の日本語研究については、まとまった翻訳も出ているが、その翻訳では、原文ではほとんど同文である部分がかなり異文であったり、また原文原稿の綴じ誤りと思われる部分が訂されていなかったり、受け容れ難いところがあるので、その翻訳によらずに引用翻訳した。

以下、主として対象とする日本語を指して単に現代語と言う。また、初めにロックの四母音体系の解釈を略述したところでは、ロックに従って成節音と言うが、その直ぐ後からは、母音と言う。母音などの特性を言う用語は、ロックほかの人びとのものとの用語に必ずしもよらず、むしろ諸論を一様に捉えようとして適当なものを一貫して押し着けた。

(1)

現代語の母音体系を非五母音であると解釈した最初の人は、ロックであった。ただし、一連の「日本口語研究」の第四論文「音素論」では、五母音体系としての解釈をしている。そのことはしばらく描くとして、先行の第一第二第三論文の発表はいずれもその4年前にさかのぼり、したがって、特に第一論文「活用」は順序からして、日本語をラテン文字で表記するために現代語の音素を簡略に概説しておく必要があった。すなわち、第一論文第一節「序」に付した脚註4でその概説を行っている。

一つの音節は一つの「成節音」を含み、これは単独であるか非成節音が一つ先行するかである。成節音は二種類あり、母音性と子音性である。母音性成節音は、

a, o, u, e および *ja, jo, ju, je* である。この第二の群は、先行する非成節音を口蓋化し、あるいは音節を単独で形成しているときには口蓋性渉り音をもって始まる。しかし、*je* は [i] であって、簡単になるように *i* と記すこととする。子音性成節音は、語頭に立たず、また非成節音に先行されず、N と Q とである。

母音性成節音の二群は、第一群の四つが基本的であり、第二群のものが複合的ないし副次的である、と見てよいであろう。つまり、母音性成節音は基本的には *a, o, u, e* の四つである。複合的な *ja, jo, ju* は、単独ではヤ行音を、非成節音が先行しているならばそれとともに拗音を、それぞれ形成するものと考えられる。そのことは、この脚註の後の方で確かめることができる。

子音13が「非成節音」として機能する。*h, p, k, t, s, b, g, z, m, n, r* はあらゆる母音性成節音の前に生起する。*d* は *a, o, e* の前にのみ生起する。*w* は *a* の前にのみ生起する。

ブロックがここに言う「子音13」は、ハパカタサバガザマナラダワ各行の子音であり、一般に言うヤ行子音を除いている。ブロックにとって、その謂わゆるヤ行子音は子音でなく、ヤ行音は子音と母音との結合でなかった。同時に、ブロックにとって、拗音を形成する謂わゆる半母音は子音的でなかつた。

この脚註4は、第二論文「構文論」の序論的な第一節「文、休止群、語」に付された脚註3に、ほとんど同文をもって繰り返されている。

ブロックが上の音素体系特に母音性成節音体系をどのように割り出したのか、興味のもたれるところである。しかし、何分、脚註のこととて、示されているのは結果のみであり、そこまでは触れられていない。第四論文「音素論」にもさほどの手懸かりは見当たらず、ここでは一つ二つ推測をすることとする。すなわち、第一に、母音性成節音体系の要として [i] が *je* と表わされている。*j* がヤ行音および拗音の形成に与ること、直ぐ前に見たとおりであるが、この *je* の場合のみはそれに適わない。対応する拗音をもたない直音はワという唯一の例外を除いてア行音とヤ行音とばかりであり、イ段音とエ段音とをヤ行音および拗音は完全に欠いている、という事実に対する、

それは巧妙な処理であったのである。第二に、非成節音の口蓋化の問題がある。一般的に言えばイ段音および拗音において非成節音が口蓋化していて、そのことは、ブロックの体系に従うときには、単に *j* の前で口蓋化しているとのみ言えよ。しかも、こうした記述の合理性は、*j*を成節音において扱うときに恐らく最たるものとなるのである。第三に、とは言っても、形態音素論からさえ音素論を厳格に分離するであろうブロックの立場からするならば、ここに挙げられることはうべない得ないとも思われるが、一段活用動詞の不変化部分の末尾は、四段活用動詞のそれが非成節音であるのに対して、成節音である。しかも、その音節は、下一段活用動詞でエ段音であり、上一段活用動詞でイ段音であって、例外がない。そこで、ブロックは、一段活用動詞の不変化部分を母音動詞の語幹と呼びつつ、第一論文「活用」第三節「母音動詞」に付された脚註8に言う、

もし成節音 *je*（脚註4を参照）が音素 *e* を含むとみなされ得るならば、この言は、母音動詞の語幹は-*e-*に終わると言うことで、簡単にすることができる。*i* が単に *je* の文字上の縮約であるからである。

と。「この言」とはくだんの事象を指している。

ブロックの後、それとは独立して、現代語の母音体系を四母音であると解釈したものに、方言音を対照しながら日本語音韻理論を打ち出した日下部「東京語の音節構成」があり、そう解釈し得もすると示唆したものに、シャウミヤンの二段階音韻論に依る城田「日本語音韻論によせて」がある。日下部城田ともに、音節における機能という面から音素を把握することを行い、拗音を形成する口蓋性は音節全体に属するとする。そして、その口蓋性はイ段音の形成にも与ってエ段音の非口蓋性に対立するということが、主張あるいは示唆されている。いま便宜城田の体系によるならば、対非成節音特性を省くこととして、

	拗 音	イ 段 音	エ 段 音	直 音	ア 段 音	オ 段 音	ウ 段 音
対 音 节 特 性							
口 蓋 性	+	+	-	-			
対 成 节 音 特 性							

高 段 性	+	-	-	-	+
低 段 性	-	-	+	-	-
後 舌 性	-	-	+	+	+

のようであり、直音はイ段音とともにヤ行音およびワ行音を除くものである。ヤ行音は拗音とみなされ、同じ非成節音をもつものとして直音にはア行音が当たられる。ワ行ワ音はア行ア音に近いものである。

(2)

現代語の母音体系を基本的には四母音であるとする、ブロックに始まる解釈は、ほかならぬブロックその人によってまず批評を受けた。すなわち、ブロックは、現代語の音素を本格的に論じた第四論文「音素論」の冒頭において、それまで採ってきた解釈を斥けてしまうのである。

この一連の研究の先行諸論文においては、日本語の諸形式は、音素的であると考えられる表記をもって言及されている。その表記の基礎となる体系は、それぞれの脚註において簡略に概説されている。しかしながら、少しく吟味してみると、その体系はそのまま認めるわけにはいかないことが判るのである。純粹に音素的であるのではなく、それは、体系化されていない形態音素の問題に甚しく述べられ、更に、多少、ラテン文字による日本語の伝統的表記に左右されてるらしいのである。したがって、日本語の発話に生起する音およびその分布に専ら立脚するところの、日本語音素論の新たで一層慎重である研究を、する余地があるのである。

この言葉にも本論にも、四母音体系は直接には相手取られられていない。しかしながら、ネオ＝ブルームフィールド学派の根本的テーゼを掲げ、それに基づいて学派を代表することとなったこの論文において、ブロックは五母音体系を探っているのである。「音に立脚する」とは音のもつ調音的特性に基づくの謂いであり、問題の集中する *e*, *i*, *j* もその点でやはり対立させて、

<i>e</i>	中段性	前舌性	母音性
<i>i</i>	成 節 性	高段性	前舌性
<i>j</i>	非成節性	高段性	前舌性

と定義される。*e* の成節性は、余剰的であるために触れられていない。

四母音体系のブロック自身による否認は、しかし、否認であると言い切ることが必ずしもできない。むしろ新しい体系を提示したというに留まっているからである。ここでは、そもそも音素とは何であるかが問題であり、ブロックが自身のかつての音素体系を斥けた言葉に触れて、サピア「言語の音型」を想い起こしておいてよい。ただし、その内容についても後への影響についても立ち入ることを差し控え、代わりに木坂の言葉を引くこととする。木坂は、サピアのその論文を翻訳し、サピアを音素論創始者のひとりに数えたマテジウスの音素論の論文2篇をも翻訳して、あわせて『英語学パンフレット第27編音韻論』として世に贈った。その「訳序」において言う、

「音素論展望」は全般的紹介の意味で加えた。訳出した3篇が概ね形態音素論に限られているのでその必要を認めたのであるが、(下略)
と。「音素論展望」は木坂の筆に成るいわゆる訳者解説であり、そこに

そのほかにも、以上の学者とは全く無関係に、音的対立の二種の区別に想到した言語学者が少なくない。なかでも、興味のあることは、文字のない言語の研究者にこの区別が夙に知られていたことである。(中略) 同様にアメリカニンディアンの言語を研究したフランツ・ボウアズがこれを明記している。その調査員のひとりであったサピア教授も早くから気づいていたわけで、独特の「音型」の説の生ずるゆえんでもある。

と言う。「音的対立の二種の区別」は音声と音素との区別である。「そのほかにも」はビンテレル、ボドワン＝ド＝クルトネ、ド＝ソスュール、スヴィート、イエスペルセンのほかにもであり、「同様に」はマインホフ、ウスラルと同様にである。ここでは、少なくもサピアにとっての音素体系が、後の論文「音素の心理的実在」にも明らかであるとおり、その言語の使用者の受け容れ得るその言語の表音的表記体系でさえあったということが、思いあわせられなければならない。すなわち、ブロックが「日本口語研究」先行三論文の音素体系を斥けた理由が、四母音体系についても当てはまっているのならば、その四母音体系はかえって興味をそそることになったはずである。

さて、ブロック自らが四母音体系をともかく斥けたことによって、またその第四論文がネオ＝ブルームフィールド学派の主張を典型的に展開していた

ゆえにであろう、現代語四母音体系は顧みられることが暫くなかったようである。それが20年余を経て憶い出されたのは、生成音韻論のマコーレイ『日本語文法の音韻部門』においてであり、その第二章「分節音韻論」第一節「語彙の諸相」第一項、日本語の子音の口蓋性を問題としたところに、ブロックの四母音体系が触れられている。マコーレイは、現代日本語の語彙を和語漢語外来語擬態語に四分し、非口蓋性子音または口蓋性子音と母音との共起関係を調べて、

	a	ja	o	jo	u	ju	e	je	i	ji
和 語	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
漢語 擬態語										
外 来 語										

と整理した。ここで、母音の前の *j* の有無は先行子音の口蓋性の有無を示し、* は生起しないことを示す。この結果から、漢語および擬態語について、

前舌性母音に後行される子音の口蓋性がその母音の高段性によって決定されるのか、あるいは前舌性母音の高段性が先行子音の口蓋性によって決定されるのか、という問題を設定する。マコーレイは、四母音体系を探ることによって第二の解が一見非常に魅惑的に思えてくると言い、その四母音体系というのがブロックのもののいささか形を変えたものであることを指摘する。

マコーレイは、しかし、可能性としての四母音体系を斥ける。まず、子音の口蓋性と前舌性母音の高段性との間でどちらからどちらを決定しても優劣をつけることができず、和語などをも含めた日本語音韻論のなかでそのことを考えなければならない。そこで、つぎに、和語については、四段活用連用形におけるように、前舌性母音の高段性によって子音の口蓋性を決定する必要のあることころがある。このとき、もとより、前舌性母音に *i* もあらかじめ認められていなければならず、実際、マコーレイはその点を問題ないものと考えるごとくである。非口蓋性子音または口蓋性子音と母音との共起関係は、和語においては漢語におけるような均齊を見せないのであり、しかも、実は、マコーレイの認めた和語の *ja* が特異であるので、くだんの均齊はマ

コーレイの考へている以上に崩れていると言つてよい。したがつて、結論として、漢語擬態語に四母音体系を採るならば、和語におけるとは逆である決定を漢語擬態語に必要とするところ、漢語にも *e* と独立に *i* を認めて五母音体系を採るならば、和語における決定を漢語にも拡張するのみで足りるのである。

もっとも、ブロックの四母音体系は、マコーレイによつても未だ斥けられていないと言うことができる。ブロックが音素体系を単層として考へ、マコーレイが複層として捉えていることは、重要な違いであり、マコーレイの立場が特殊に見えもあるが、ベンク『日本語音素論』も現代語の語彙を和語漢語外来語に三分した上でそれぞれの音素体系を論じていて、その公刊はマコーレイに先立つ。その問題が底に横たわつてのことであるが、なお、四母音体系に特に関係して、今までともに *j* と表わしてきたものに、見逃し得ない違いがあるのである。マコーレイも認めていることで、ブロックが *j* を母音の特性とするのに対し、マコーレイが *j* をただちに口蓋性という子音の特性としている。そのため、そもそもマコーレイの二者択一の問題設定に対してブロックの四母音体系は既にどちらの解にも従わず、その母音の特性 *j* は、子音の口蓋性を決定しもし、前舌性母音の高段性を決定しもする。子音の口蓋性を決定して後にそこから前舌性母音の高段性を決定するということもないで、ブロックの四母音体系がマコーレイの問題の第二の解に近いというわけでもないのである。マコーレイの挙げた和語における事象との関聯にしても、もともと和語が四母音体系であり、前舌性母音自体で高段性が決定され得ている。

こうして、ブロックの四母音体系はなお生き続けていると見えるのである。

ところで、マコーレイは和語について六母音体系を呈示している。これはやはり子音の口蓋性に關係しつつ母音 *a* をめぐる問題である。すなわち、和語においては母音のうちで *a* のみ非口蓋性子音とも口蓋性子音とも共起して均齊を破り、しかも、母音 *i* に関する決定で既に知れたごとく、母音の前舌

性かつ高段性によって子音の口蓋性を決定し得るのである。当然、通常の母音 α のほかに前舌性かつ高段性の母音 α' を設定することをそぞられる。マコーレイはこの六母音体系を漢語擬態語にも及ぼし、母音 \circ および u に対しては先行子音の非口蓋性または口蓋性があらかじめ指定されているとした。こうした六母音体系は、しかし、受け容れ難いものである。第一に、和語における口蓋性子音と母音 α との共起は明らかに特異であって、前舌性かつ高段性の母音 α' は、設定したところで、ほかの五母音と対等であり得ない。第二に、漢語擬態語において母音 \circ および u の先行子音の非口蓋性または口蓋性があらかじめ指定されているのである以上、母音 α の先行子音もそれにならってよい。第三に、マコーレイ自身注意しているように、母音 α はもともと低段性であって、つまり新たな高段性かつ低段性の母音 α' というものが全く非現実的である。マコーレイは、この異常について

しかしながら、わたくしの採りたいと思う立場は、その異常も、その特性結合が文法の出力に現われないようにその文法が設定される限りにおいては、いささかたりと支障とならない、というものである。

と弁明し、やがて生成意味論を築く萌芽を読み取らせさえしているが、また、かつて論文「サピアの音素表記」としてサピアの音素論の特徴を扱って、サピアの音素体系の諸セグメントはその体系から結果する音声の諸セグメントの部分集合であるということを、指摘している。音素体系の諸セグメントはその音声の諸セグメントの部分集合であるといいう一般的仮定は、意義が必ずしも明らかでないが、キバルスキイの論文「言語の普遍性と言語の変化」など高く評価するものもあって、象徴的な意義は認めらるべきように思われる。

音素体系の諸セグメントは少なくも音声として現実に存在し得るものでなければならない、という仮定の上に立つとすれば、ブロックの四母音体系にも問題がないとは言い切ることができない。母音の特性 j であって、それは、先行子音を口蓋化し、あるいは先行子音が存在しないときには口蓋性の渉り音として顕現するものであった。同じ音素が異なる音声として顕現する

ことには問題はないが、いまは、一方の、先行子音を口蓋化するということだが、音声の顕現を制約するばかりで音声そのものではないので、問題である。この問題は、しかし、解消が容易であって、例えばアクセントを顧みればよい。アクセントは音声そのものではむしろなく、ブロックの特性jも、音節内部において母音が担つて子音に働き掛けるところのプロソディーとして捉えることができる。すると、口蓋性渉り音としての特性jの顕現は、このプロソディーの特殊な場合における在り方とみなすこともでき、あるいは改めて口蓋性渉り音という一子音を設定させるものと見ることもできる。ついでをもって言うならば、子音の先行する場合においてjが音声[j]としてセグメンタルに顕現していると見ることは、困難であると思われる。無声性子音をもつ音節は環境によって全体が無声性で顕現し、そうでない環境におけるものとの対応を考えるならば、セグメンタルに存在すると見られた音声[j]をめぐっては、

c[無声性] j[無声性] v[無声性] / ある環境
c[無声性] j[有声性] v[有声性] / 他の環境

と理解することとなるが、その含みとなる、相隣る有声性音ふたつがともに無声性の状態に移るという内容が、不自然であるからである。もっとも、ブロックの第四論文「音素論」は、その不自然な内容をいとわないかも知れない。

(3)

ブロックの第一論文「活用」脚註4の音素体系特に四母音体系は漢語によく適合する、というのがマコーレイの議論にあって重要な点である。ブロックも、外来語の特殊な音が将外にあることを当然心得て、封じ手を打っている。論文の順序が前後するが、第四論文「音素論」の「序」において、ブロックは、外来語の音というものが一般に音素分析を難しくすると言う。ブロックにとっての音素体系は、発話のうちに生起するあらゆる音が相互に対等である単層である。しかも、現代語について言うならば、外来語特に英語の

受け容れ方に、人ごとに甚しい差異がある。つまり、英語の受け容れ方がさまざままでそれに単層である諸方言から現代語は形成されている、というわけであって、ブロックは分析の対象をその諸方言のうちで限定することとしたのである。

方言ふたつのみを記述することとする。英語からの借用語がほかの語の発音に充分に同化させられているもの、および、(英語を自在にこなす人びとによって主として話される)いま一方の極端のもので、それら借用語が特殊な音の最多数の型と組み合わせとによって特徴づけられるものである。この方言ふたつは、それぞれ「保守的」および「革新的」として言及することとする。(中略)(保守的方言は第一~七節で、革新的方言は第八節で扱う。)

すなわち、和語の音は漢語の音体系に含まれ、漢語の音は外来語の音体系に含まれるという条件のもとに、ブロックの保守的方言の音はマコーレイの漢語の音であり、革新的方言の音は外来語の音である。そうして、第四論文は、保守的方言の分析に多くを費して、専らそれとの差異という観点から革新的方言を述べるが、保守的方言重視のこの行き方は、実は第一論文以下に通ずるものであって、と言うより先行三論文においては保守的方言をしか扱わなかつたのである。ブロックの四母音体系に関わる問題は、したがつて、一方、特に漢語のみについても難がないかという点において、他方、音素体系を単層としたためにほかの語彙に生じた弊はないかという点において、対せられることになる。

もっとも、語彙を限られずに一般的に扱われ得る事象もあるわけである。例えば、特性 *j* に一般的には先行子音のみが働き掛けられて変質するところを、母音 *e* は後行しながら影響を受けて変質を来たしているのである。子音を先行させていない特性 *j* は、母音 *a, o, u* に対しては音声 [j] として顕現するが、母音 *e* に対してはそのような音声を示さずにもしろ零となり、言い換えれば、複合的な母音 *je* がそれのみで顕現したときの音声は、基本的な母音 *a, o, u, e* がそれのみで顕現したときの音声の系列に属しているのである。

さらに、特に特性 *j* と子音 *w* との関係からも、語彙を限られずに問題を指

摘することができる。母音の特性 *j* と子音 *w* とは、なるほど、母音との共起のし方に差異があり、また子音の先行を許すか否かで全く相対して、そのことこそ、一方を母音の特性に他方を子音に分けさせるゆえんである。しかしながら、対応する拗音をもたないという点について、ア行音とヤ行音とのほかにワ行ワ音が唯一ながら存在し、しかもそのワ行ワ音をワ行音と一般化することに支障がない。また、ブロックも、第四論文「音素論」において、

<i>j</i>	非成節性	高段性	前舌性	母音性	すなわち半母音
<i>w</i>	非成節性	高段性	後舌性	母音性	すなわち半母音

と定義していること、特にこの *j* と *w* とふたつのみを非成節母音すなわち半母音と扱っていることから、端的にうかがい知れるごとく、*j* と *w* とはある重要な性格を共有するものである。語「場合」の顕現がバアイ、バヤイ、バワイ三とおりの音声をもち得ることも、いま思いあわせられてよい。したがって、*w* の分布の限られていることを偶然の結果であると理解する余地もそれなりにあるわけであって、*j* と *w* を対等に扱うことは当然でさえあり得るのである。ここに、ブロックの四母音体系は、体系の均齊というものが要求されるならば、かえって維持され難くなっている。すなわち、ブロックの四母音体系の構成にならって特性 *j* とともに特性 *w* を設定することとして、第一に、*je* [i] に対応させて *wo* [u] とするときには、

	<i>e</i>	<i>a</i>	<i>o</i>	
	<i>je</i>	<i>ja</i>	<i>jo</i>	<i>jwo</i>
	(<i>we</i>)	<i>wa</i>		<i>wo</i>

のような三母音体系が現われることになる。括弧内は偶然の欠如として想定されたものである。第二に、逆に母音 *u* を維持するために母音 *i* を設定するときには、ほかならない五母音体系

<i>i</i>	<i>e</i>	<i>a</i>	<i>o</i>	<i>u</i>
(<i>ji</i>)	(<i>je</i>)	<i>ja</i>	<i>jo</i>	<i>ju</i>
(<i>wi</i>)	(<i>we</i>)	<i>wa</i>	(<i>wo</i>)	(<i>wu</i>)

が現われる。ふたつの体系の間での選択は、ただちにはすることができない。

さて、漢語における音については、原語の音の状態がからみ、またつまりは漢字の音であるということがからんで、的確な問題の提出が必ずしも容易でないと思われる所以であるが、なおひとつ挙げることとする。日本における漢字の音の在り方は1音節か2音節かに限られて、そのうちの2音節のものの第二音節に現われる音は、一般に

=イ =キ =チ =ン
=ウ =ク =ツ (=ッ)

である。すなわち、=ンおよび=ッを別格としてイ段音とウ段音とがあるばかりであり、複合的な母音 *je* と基本的な母音 *u* とという把握では渁れてしまう対等性が存在するのである。音素論の立場としては=エおよび=オなり長音なりを認めるものもあるであろうが、そうした立場によるとしても、ウ段音とオ段音との対等性を伴なうことなくイ段音とエ段音との対等性が見出だされたり、イ段音とウ段音との対等性が崩れたりすることは、ない。こうした漢字の音の性格は、すぐ上のようにならみつくことどもがあって、四母音体系の否認にただちにつながるとは言い切ることができないが、四母音体系にとっては間違ひなく厄介であるはずである。

ロックの保守的方言における四母音体系にとって漢語のほかに問題となる語彙は、専ら和語である。和語において生起する音は、マコーレイの整理によってほぼ知れたごとく、漢語の音体系のうちの直音ばかりである。すなわち、母音の側から言うならば、特性 *j* を含む複合的な母音が、ただ一つ、基本的な母音四つに混って存在することとなり、子音の側から言うならば、子音と特性 *j* との共起が、母音 *e* の前で自由であり、そのほかの母音の前であり得ないこととなって、体系上の均齊が見られない。ただ、基本的な四母音と際立って異なる性格を複合的な母音 *je* が特に見せるとあらば、その不均齊は逆に均齊と認められることになる。例えば、北原「形容詞「ヒキシ」攷」によって指摘された、古代の形容詞の語幹の末尾の音の問題を、ここに参照することができる。すなわち、北原によるならば、古代の形容詞の語幹の末尾は、イ段音をシク活用においてのみ存在させ、他のエ段ア段オ段

ウ段音をそのような条件下に措かない。この北原の指摘から推すならば、ク活用とシク活用との分別の失われた現代語においては、末尾の音はエ段ア段オ段ウ段音のどれかであるかシであるかである。「いい」「大きい」「くちい」あるいは「ぱっしい」「丸まっしい」などの例外もあるが、イ段音つまりは母音 *je* の特異性が著しく、四母音体系を支持する有力な事象であり得、ただ、シの一音がどのような意義をもつかというところが、不明を残していると見受けられる。しかも、そのような形容詞に匹敵して母音 *je* に特異性を見させるものは、ないのではないかと思われる。動詞の活用について、ほかの基本的な四母音が生起するところを複合的な母音 *je* のみが決して生起しないといったことは、もとより認めることができない。活用に関係しているであろう事象、すなわち、第二論文「活用語の派生」にも関係するところの

「生」	イキル	イカス	「延」	ノビル	ノベル
「明」	アケル	アカス	「曲」	マガル	マゲル

および名詞ではあるが

「酒」	サケ	サカニ	「木」	キ	コニ
-----	----	-----	-----	---	----

といった事象においても、やはり事実ではない。それどころか、ここに挙がったような動詞の系列のあるものは、さきの特性 *j* および *w* をめぐる問題に重要な示唆を与えることになるのである。

「明」	アケル	アカス	「懸」	カカル	カケル
「逃」	ニゲル	ニガス	「当」	アタル	アテル
「覚」	サメル	サマス	「重」	カサナル	カサネル
「晴」	ハレル	ハラス	「決」	キマル	キメル
「冷」	ヒエル	ヒヤス	「変」	カワル	カエル

左欄の系列および右欄の系列において、それぞれの最後のもののエは、抽象的には、*i* と対立する *je*、および *we* と認められてよいはずのものである。その抽象性は、固より、動詞の活用

「買」	カワ	カエ	カイ	カウ
-----	----	----	----	----

などに基づいて *wi*, *we*, *wa*, (*wo*,) *wu* を認めることに並行させらるべきである。

動詞の活用については、第一論文「活用」脚註8の、一段活用動詞の語幹が母音 *je* の認定によってすべて母音 *e* に終わることになるということが、なるほど魅惑的な合理性をもっているようにも思われる。しかしながら、ブロックが第一論文に示した活用の種類は

四段系	四段	行く ます 下さる, なさる, 仰しゃる, 入らっしゃる, ござる
	変格	
一段系	一段	為る, 来る
	変格	

と分類されたものである。この分類の基準は語幹末尾音の相違および語尾の相違にあって、まず四段系と一段系とは語幹末尾音の子音であるか母音であるかの相違によって分かれ、しかもつぎに四段と四段系変格とあるいは一段と一段系変格とは語幹末尾音の相違によって分かれるのではない。一段と一段系変格との相違について言うならば、一段が母音 *e* であって一段系変格がそのほかの母音であるというようなわけであるのではなく、変格「為る」の語幹はセ, シ, ス, と交替してそのひとつのセが母音 *e* を含んでいる。したがって、一段活用動詞が一様に語幹末尾に母音 *e* をもつということがあったとしても、その一様性にさして積極的な意義は見出だし得ないのではないかと思われる所以である。

ブロックの保守的方言における四母音体系にとって外来語と擬態語とが問題とならないのは、漢語に特徴的であるような音配列の制約もなく、和語に特徴的であるような形態間の交替関係も特にないからである。ただし、さきの特性 *j* および *w* をめぐる問題はやはりからみついている。

ところで、保守的方言と革新的方言など、現代語についてブロックの想定した諸方言は、その定義上、分岐したのがたかだかここ百年程度以内であって、それらの祖語に当たるものは、少なくも音体系に関する限り、やはり定義上、保守的方言にほかならない。保守的方言と革新的方言とをそうした

時間の関係において捉えることは、ブロックにあったようで、第四論文「音素論」第八節に革新的方言を保守的方言との差異という観点から記述するに当り、

この節の内容は、1946年12月30日シカゴの言語学会研究発表会で発表した原稿においては、通時論の観点から論じてあった。

と脚註を施している。保守的方言をそのような時間の上で更にさかのぼるとき、現代にお成立する可能性の全く否定され切ったわけではない四母音体系がどのように維持され得るか、問うておかれてもよい。いま、イ段エ段オ段音の甲類乙類が併合し終わった後の日本語からいくつかの事象を拾い上げて集約し、虚構ではあるがしかし非現実的では決してない言語を設定して、これを古代語と言って指すこととする。まず、この古代語における漢語は、カ行音に関連して

キ ケ カ コ ク
キヤ キヨ キュ
クキ クエ クワ クヲ

という相互に対立する音を頭現させる。直音と開拗音との関係が四母音体系を予想させるが、なお合拗音が存在して開拗音との対等性を主張し、しかも、クヲを見せているために、このクヲが対称的にエ段開拗音を偶然の欠如と想定させるか否かというところで、四母音体系は微妙な地位に立たされている。四母音体系を維持するためにはエ段開拗音の欠如を合理的であると考えなければならないが、クキの遊離してしまうこととウ段合拗音の欠如していることとは、四母音体系としての均齊をかえって著しく損っていることになる。つぎに、和語漢語とともに、ア行ヤ行ワ行音について、五母音体系で言えば

i e a o u
(ji) je ja jo ju
wi we wa wo (wu)

という相互に対立する音をもつ。ただし、ji および wu の想定は、和語に関するものであって、動詞の活用における交替

「老」 オイ オニ
「植」 ウエ ウウ

に基づく抽象的存在としてのものである。ここにおいて、四母音体系の存立は、はなはだ危うくなつたと言うことが一往はできるのである。

こうした古代語の状態は、さきに現代語について特性 *j* および *w* をめぐって議論した事象に対応するものであり、ともかく四母音体系を否認させるものである。そして、その特性 *j* および *w* をめぐっては、古代語は現代語に見られない著しい特徴をもつてゐる。特性 *j* からヤ行音の *j* のみを分離させ、特性 *w* からワ行音の *w* だけを分離させる特徴である。言い換えれば、ヤ行音の *j* およびワ行音の *w* をほかの行の音の子音と対等に捉えさせ、ヤ行音およびワ行音をア行音の言わば変種と見えなくさせるだけの事象が、古代語に特に和語を中心として存在する。語中または語尾に存在する音素としてのア行音は、先行音節と交渉してそれと一音節化しない限り、音声として顕現することが一般にできないが、ほかの行の音は、ヤ行音およびワ行音を含めて、そのような制約を受けることがないのである。もとより、語中語尾のヤ行ワ行音を、ア行音が先行音節との一音節化を拒んで変容したものと解することは、いかにも現代語の和語「場合」におけるごとき事象が存在するにはせよ、ア行音とヤ行ワ行音との形態上の交替として立証される事象が一般に存在しないゆえ、斥けられる。こうして特性 *j* および *w* からヤ行ワ行音の子音を分離することにより、ブロックの四母音体系の抱えていた問題の或るものも、回避されていることにはなる。子音を先行させていない特性 *j* が母音 *e* の前で零となってほかの母音の前で口蓋性渉り音となる、といった音声としての顕現のずれが、なくなつた。子音が先行しなければ、特性 *j* はいまや前舌性母音 *e* を高段化するしかできない。また、特に和語において、特性 *j* を担った後舌性母音 *a, o, u* が子音と共に起しない、ということがなくなつた。特性 *j* を担った後舌性母音の存在は、既に和語に無意味である。いま、ヤ行ワ行音の子音を *j* および *w* で、それらを分離した特性 *j* および *w* を^{..} および[^] で、それぞれ新たに表わすこととするならば、上に挙げた音は、五母音体系においては

<i>i</i>	<i>e</i>	<i>a</i>	<i>o</i>	<i>u</i>	<i>ki</i>	<i>ke</i>	<i>ka</i>	<i>ko</i>	<i>ku</i>
<i>ji</i>	<i>je</i>	<i>ja</i>	<i>jo</i>	<i>ju</i>			<i>kä</i>	<i>kö</i>	<i>kŋ</i>
<i>wi</i>	<i>we</i>	<i>wa</i>	<i>wo</i>	<i>wu</i>	<i>ki</i>	<i>kē</i>	<i>kā</i>	<i>kō</i>	

のようである。ただし、なお、ヤ行ワ行音をア行音の類縁と見せる事象も確かに存在する。現代語の語「場合」のごとき顕現、また語「恩愛」オンナイ「陰陽」オンミャウ「今日は」コンニッタのごとき連声が、それである。

四母音体系の否認に繋がる古代語の事象を、さきの現代語の事象に沿いつつ補う。ただし、イ段音が際立った特異性を示すところの、形容詞の語幹の末尾におけるシあるいはイ段音の存在条件は、古代語においてむしろ無例外的に一層鮮かである。しかも、シあるいはイ段音とシク活用とがなぜ結びついているのか、その不明は残っている。その事象を別として、四母音体系を支持しないであろう事象の第一に、漢語において、漢字音の第二音節は多く

= イ	= キ	= テ	= ム
= ウ	= ク	= ツ	= ニ (= ッ)

のようで、イ段音およびウ段音を主体とし、撥音さえ元はその範囲のうちに捉えられ得ていたと知られる。この第一点に関係があるとも解されることで、第二に、和語において音便があって、イ音便およびウ音便の名が体を示しているとおりであり、ほかには撥音便と捉音便との言わば非母音的なものがあるばかりである。第三に、動詞の活用および派生において、イ段音がほかの段の音との対等性を失うというようなことがない。第四に、動詞の活用の種類のうち下一段下二段および上一段上二段各活用が、語幹末尾に一様に母音 *e* をもたされ得たとしても、サ行変格活用動詞「為る」も語幹に母音 *e* をもって、イ段音とエ段音との関係に必ずしも積極的な意義を与え得ない。

(4)

特性^{..}およびヘスナワチヤ行ワ行音の子音を分離した特性 *j* および *w* は、同時に重複して用いられることにより、三母音体系の解釈を可能にする。特性^{..}およびヘを同時に重複して用いることの妥当性をいま問わないこととし

ても、三母音体系というものは超越的な性格を帶びていると言うことができる。ヤコブソンおよびハレの論文「音韻論および音声学」の第四章「音素型式の形成」第一節「層形成」第五項「口腔共鳴特性の型式形成」に、

世界の諸言語においては、しかし、母音について三角型式が四角型式より優勢であり、子音について更にそうである。母音型式についても子音型式についても、それは最小の原型であり、(下略)

ということが言われている。実際、例えば現代フランス語の母音ですらも、口腔性と鼻腔性との対立を問わないとして、三母音体系に持ち込むことができるであろう。しかしながら、こうした性格をもつものは措き、これよりも具象性をもつものに向かうこととする。

逆に、現実の音声にかなり近づくときには、十母音体系といった解釈も可能である。小泉「日本語のアクセントと母音の音価」の第二節「母音音素と異音」においては、

日本語の同一母音音素にはそれぞれ緊張性と弛緩性との異音があり、緊張性母音においては高段性母音は高め、中段性母音と低段性母音とは低めに調音される。ただし、どこまでもアクセントの高低が決定的要因であって、緊張性弛緩性はその付随的余剰的特徴である。

ということが言われている。緊張性および弛緩性とは音声学上にも問題を抱えた用語テンスおよびラクスの翻訳であり、むしろ、緊張性母音に比して弛緩性母音は調音点が舌の中立位置に近づいている、という言い方がよいと思われる。また、アクセントの核なり滝なりに至る高い部分において緊張性母音であり、そのほかの部分において弛緩性母音であると言うべく、いわゆる平板式アクセントにおいては高い部分でも緊張性とは言い難いのであって、単純にアクセントの高低に緊張性弛緩性が伴なうのではない。さらに、アクセントの核なり滝なりによる母音の緊張性弛緩性の対立は、その母音を主音とする音節全体を巻き込み、子音についても緊張性弛緩性の対立を成立させることとなっている。ダニエルズ『標準日本語の音体系』の「序説」の「強度あるいはピッチ」の

ピッチが高いことは、高いあるいは強い部分とそうでない部分との相異にとつて、本質的ないし基礎的因素ではない。本質的な要素は、強度、強い母音を生み出す際の緊張である。

のように主張することもでき、無声音のアクセントなどを説明するにはこうした解釈の方がかえって有用であろう。そのようなことはともかくとして、緊張性母音と弛緩性母音とを音素として独立させるならば十母音体系が現われる。これを少しく抽象するならば、すなわちアクセントの要因によって相補分布をする緊張性母音と弛緩性母音とを一音素としてまとめて扱うならば、五母音体系に到り着くことが明らかである。

さて、四母音体系の解釈を支持しないであろうとして上に挙げた事象は、また支持するであろうとして挙げた事象とともに、形態に関わるところが多い。そこで、一般化するならば、形態音素が音素設定の根拠となり得るか、というところが問題である。ブロックのように音素設定の根拠を音の調音的特性と分布とに求めるときには、音素は形態とともに抽象されて形態音素設定の根拠となるものであり、当然のこととして逆ではない。しかも、音の調音的特性あるいは分布によっても、四母音体系の解釈にはさしたる難がないのである。すなわち、四母音体系における母音は五母音体系におけるそれより調音的特性に対して均齊が取れていないようでもあるが、例えば

前舌性	中舌性	後舌性
高段性		u
中段性	e	
低段性		a

という図式化を行なうときにはかえって均齊が取れていることになり、調音的特性というものはここに見られる程度の恣意性をどのみち避けることができない。分布に対しては、四母音体系における母音は、解釈のそもそもの契機がそこにあったことから知れるごとく、有利である。こうしたブロックのような立場と対極にあるものが、サピアのような立場、形態音素すなわち音素とするものである。この立場は、もとより音の調音的特性および分布を無視するのではないが、形態のパラディグマティクな諸連関のうちにおいて形

態を表わすというところに音素の根本を捉るために、形態における音をも無視することができない。言語が意味を遣り取りするための機構である以上、意味が言語の諸単位の考察に配慮せらるべきことは当然ですらある。加うるに、一般に、音韻史を溯行するならば、音の調音的特性および分布に基づいて設定された音素は形態音素のうちに解消する。言い換えるならば、形態音素からそのような音素が乖離しているということは、そのような音素が過去の史的条件音変化を担わされているというに過ぎないのである。五母音体系は、この、形態音素こそ音素にほかならないとする立場によって、初めて自然に解釈の解となつた。

ブロックも、現代語を表記するにはブロック自身の音素に基づくよりも形態音素に基づく方が適当であることを、認識していた。「日本語口語研究」第四論文「音素論」の末尾第九節「正書法についての覚え書き」において、

この一連の研究の先行三論文において採った日本語の表記は、厳密には音素的ではないが、標準的な正書法として正当化し得る。保守的方言——先行諸論文において扱った唯一の方言——の音素は、ある部分はこの論文におけると同じい文字によって、ある部分は形態音素上の特殊な記号あるいは結合によって、表示される。

と言っている。文字は固よりラテン文字であり、その *i* も最早四母音体系の *je* の縮約であるのではなくともと五母音体系の一であるものとして評価されていることは、ここの「形態音素上の特殊な記号あるいは結合」の一に
č/, š, x/ が、/t, k, c, č/ の前で……………*ti, si, hi*

が挙がっていることによって、また第四論文の当然の帰結として、明らかである。ブロックが現代語について採ったラテン文字表記は、上引第四論文冒頭部分のうちの「ラテン文字による日本語の伝統的表記」に付された脚註3 に、

わたくしの表記に特に影響を与えたのは、日本内閣1936年訓令による整然と組織立てられた訓令式ロウマ字（国定ロウマ字）であって、1885年のいわゆるヘボン式ロウマ字ではない。しかしながら、ヘボン式ロウマ字は、非組織的で煩雑であるようではあるけれども、音素表示にかなり近いことが判るものである。

と説明されている。ヘボン式ロウマ字に多少譲歩させられて訓令式ロウマ字となった日本式ロウマ字は、五十音図の組織を充分に考慮してその各行音の子音および各段音の母音にラテン文字を一貫させ、そのラテン文字一一が形態音素によく対応するとみなされ得る。ヘボン式ロウマ字は、五十音図の組織を一往は踏まえながらも英語の音声とラテン文字との関係を現代語に当てはめ、そのラテン文字一一ないしその特殊な結合がいわゆる音素一一に対応するとみなされ得る。そうであるからには、ブロックにおけるラテン文字表記の論理は当然である。もっとも、日本式ロウマ字が形態音素として完全に貫徹されるためには、古典仮字遣いを容れて対応せさせらるべきところが、多分にある。ただ、母音については、ロウマ字のどの表記様式も一往問題を生じないでいるのである。

参考論著

- 論著者の後の数字は該論著公表の西紀1900年代下二桁を表わす。
- 木坂千秋40 英語音韻論（英語学パンフレット27）
=木坂千秋57 英語音韻論（英語学ライブラー10） 研究社
北原保雄68 形容詞「ヒキシ」攷 国語国文37-5 pp.1-20
キパルスキー Paul Kiparsky 68 Linguistic Universals and Linguistic Change
=Emmon Bach-Robert Harms 68 Universals in Linguistic Theory. New York ; Holt, Rinehart and Winston. pp. 170-202
日下部文夫62 東京語の音節構成 音声の研究10 pp.171-197
小泉保67 日本語のアクセントと母音の音価 音声学会会報126 pp.9-11
サピア Edward Sapir 25 Sound Patterns in Language
=David Mandelbaum 51 Selected Writings of Edward Sapir. Berkley ; University of California. pp.33-45
城田俊71 日本語音韻論によせて 言語研究59 pp.15-42
ダニエルズ Frank Daniels 58 The Sound System of Standard Japanese. 研究社
ブロック Bernard Bloch 46-50 Studies in Colloquial Japanese
=Roy Miller 77 Bernard Bloch on Japanese. New Haven; Yale University.
pp. 1-165
I Inflection (46年)=Miller 70 pp. 1-24
II Syntax (46年)=Miller 70 pp. 25-89
III Derivation of Inflected Words (46年)=Miller 70 pp. 90-112

IV Phonemics (50年)=Miller 70 pp. 113-165

ベンク Günter Wenck 66 The Phonemics of Japanese. Wiesbaden; Otto Harrassowitz

マコーレイ James McCawley 67 Sapir's Phonologic Representation. International Journal of American Linguistics 37 pp.106-111

マコーレイ James McCawley 68 The Phonological Component of a Grammar of Japanese. Den Haagen; Mouton

ヤコブソン・ハレ Roman Jakobson-Morris Halle 71 Phonology and Phonetics

=Roman Jakobson-Morris Halle 71 Fundamentals of Language. 2nd, revised edition. (Janua Linguarum, Minor 1) Den Haagen; Mouton. pp. 11-66.